

令和5年度 兵庫県立氷上特別支援学校 学校評価 報告書

1 教育目標						
こころ豊かにたくましく生きる力を育み、将来、社会の一員として、学習を続け、生活できる人間を育成するため、一人一人の児童生徒の能力を伸ばす教育を行う。						
2 令和5年度の重点課題						
(1) 小・中・高一貫したキャリア教育の推進 (2) 「つきたい力」を意識した授業づくり (3) 危機予防・対応が可能な学校づくり (4) 兵庫県版コミュニティ・スクールの推進 (5) テームによる指導支援体制						
3 学校自己評価						
重点課題に対して、各学部・係部が設定した取組を、全職員で評価し、その平均値を次のA～Dの4段階で判定した。 A：良好 B：概ね良好だが一層の取組が必要 C：取組に相当の工夫が必要 D：取組の見直しが必要						
重点課題	重点課題についての目標（学部・部）	目標実現のための取組	判定	次年度へ向けて	担当	
小・中・高一貫したキャリア教育の推進	授業づくりにおけるキャリア教育の観点の踏まえたい設定	指導路案にあるキャリア教育の観点を必ず記入し、事前に配布することで職員の間で共通理解を図る。 中・高部、高等部と交流学習を定期的に行い、学習内容や児童生徒の実態に関して情報交換を行う。	A A	指導路案にあるキャリア教育の観点を項目への意識を促す働きかけは少なかったが、記入者は毎回意識することができた。各授業の単元の始めに意識できるよう次年度も促していく。 歩行学習を基本に交流を行った。天候やグループ分けで予定を変更することが多くあった。交流学習の内容を検討する時に協議を深め、改善を図る。今後も交流の機会を大切に積み重ねる必要がある。	小学部	
	児童生徒会活動の充実	代表委員会の活動に児童生徒が主体的に参加することができるように工夫をする。	A	全校集会や代表委員会の活動内容を児童生徒から意見を聞き出し、企画運営できるよう児童生徒同士が協議する時間を確保するなど工夫を引き続き行う。	生徒指導部	
	キャリア教育の充実	キャリア教育全体計画と発達段階表の活用に向け、推進の在り方を検討する。 キャリア教育に係る研修会を開催する。	A A	今年度は①氷上キャリア教育発達段階別取組一覧表の作成、②キャリア教育の観点上に立った教育支援の共通理解、③来年度のキャリアの方向性の3点について検討を重ね、キャリア教育への理解を深めることができた。次年度は作成した発達段階表の効果的な活用を推進したい。 学部別キャリア教育研修会では、学部の実態や個人に焦点を当てた実践報告を行ったことで各段の指導におけるキャリア教育との関連を発見したり再認識したりできる機会となりキャリア教育への理解を深めることができた。引き続き現場での実践例を紹介できる研修会を設定したい。	キャリア教育部	
	進路指導の充実	進路指導連絡会を開催し、関係機関との情報交換を行うとともに、現場実習等に助言を生かす。 高等部の生徒や保護者等に進路セミナーを行い、進路先を考えたり、選択しやすくなるように情報提供を行う。	A A	地域の関係機関の方々からの視点から意見や感想を聞くことができた。技能検定練習など実践に即した内容やICT機器を巧みに使った取組について高評価を得た。課題は卒業後の環境の変化に対応できる指導（出口（卒業）に向けて計画的な支援の仕方）について助言をいただいた。口 生徒、保護者に対して過年度生の進路状況や高等部卒業後の選択、相談機関、進学、契約や利用の流れなどについて情報提供を行った。今後、引き続き情報提供を行うとともに生徒が自分の進路を考える機会としてセミナー等計画し、自己選択・自己決定に向けた指導を行ってきたい。	キャリア教育部	
	個別の教育支援計画の充実	個別の教育支援計画を、学部や保護者、関係機関と子どもの実態やニーズを共有するためのツールとして活用することができるように教員に説明や研修会を実施する。	A	今年度規定集の関連事項を改定する準備ができた。次年度当初の共通理解会議で説明する予定である。	教育支援部	
	教育課程と個別の指導目標を意識した授業改善	授業研究を通して、グループ学習（自立活動）の授業改善に還元して取り組む。他の授業に関しても授業改善への意識を高める。	A	各グループ意欲的に取り組むことができた。他の授業に関してもPDCAサイクルを意識した授業改善に関心が高まった。次年度も引き続き取り組む。	小学部	
「つきたい力」を意識した授業づくりの推進	教育課程の検討	学級の日や学部会等で意見を出し合いながら、教科等の構成や時間数等、教育課程について検討や見直しを行う。	A	中学部で行った評価では3.4であった。来年度の教育課程について、アンケートや話し合い等で意見を聞きながら検討や見直しを行った。来年度も生徒にとってもよりよい教育課程にするために引き続き検討や見直しを行っていく。	中学部	
	生徒がわかって動ける授業の展開	授業研究での取組を中心としながら、生徒の実態に合ったねらいや学習指導要領に基づいた授業展開を考え、実践する。	A	中学部で行った評価では3.1であった。授業研究では、グループごとに生徒がわかって動ける授業づくりについて考え、取り組んだ。引き続き授業づくりについて取り組んでいく。	中学部	
	個別の目標を意識した授業改善	授業研究をはじめ普段の授業において、個別の目標を意識した各教科学習の授業改善に取り組む。	A	個別の目標や生徒につきたい力を意識した授業を行うことができた。次年度は、教育課程を変更したことと効果的な教育活動となっているか検証を行う必要がある。また、生徒の実態に合った狙いやつきたい力意識して生徒が主体的に動ける授業展開を考えるとともに、必要とする支援について適切に判断する。	高等部	
	「つきたい力」を意識した授業づくりの推進	3つの観点を含む文章作成の研修や述分類表などを活用し、共通理解を図る。 個別の指導計画をクラスで読み合わせをして、記載内容を複数の目で確認する。	A A	次年度も年度はじめに別の指導計画（教科等）の書き方に関する職員研修を実施していく。 次年度も引き続き記載内容を複数の目で確認していくようにする。	教務部	
	「つきたい力」を意識した授業研究の推進及び授業改善	月1回程度授業研究日を計画的に開催する。 指導案の作成や公開授業、授業改善チェックシートの活用等を通して、日々の授業実践に役立てる。	A A	今年度の授業研究は、グループの構成や規模等適切に設定できた。授業を軸にして、グループの構成員で協議を深めることができ、学びを得るよい場となった。次年度も計画的に月1回程度の頻度で開催できるようにしていく。 研究授業においては授業者のみならずグループのメンバー全員で、授業改善を意識しながら取り組むことができたが、各々の授業に研究内容を反映させることはできなかった。次年度は、研究成果をグループ全員で確認するなど成果の共通理解を図るとともに、公開授業ワークショップで実践の共有を図る。	教務部	
	子どもの実態や学習指導要領、キャリア教育発達段階表を意識した教科・領域の年間計画の作成	教科・領域の年間計画を、学習指導要領やキャリア教育発達段階表を参考に作成するとともに、随時見直しをする。	A	学習指導要領の内容を網羅したものになるように適時依頼をするなど意識付けをしていく。年度末までの計画が適切に記入されているか点検をし、記入漏れがないようにする。	教務部	
	自立活動に関する教員の専門性の向上	年度初めに「自立活動について」の研修及び基礎講座を行い、自立活動について教員の理解を深める。	A	年度当初に自立活動全体研修会を開催し、自立活動について教員の理解を深める。	教育支援部	
	危機予防・対応が可能な学校づくりの推進	安全な学校づくりの推進	教室や廊下等に設置されているロッカーに転倒防止金具を取り付ける。 保護者と迅速に連絡が取れるようにさくら連絡網を活用する。	A A	全職員体制で危険箇所の調査を実施した。事務室と連携し、購入取り付けを継続中である。長寿命化工事との兼ね合いで、保留所もあり、工事の進捗状況に応じて順次対応していく。 今年度さくら連絡網を活用し保護者に連絡をすできた。運動会、学習発表会、参観日など、約2,000件の文章や表形式のデータを送信できた。来年度より、学校通信や学部通信、アンケート配布や児童生徒の欠席連絡など、アプリを活用する機会を増やし、保護者との連絡を一層迅速に行いたい。	総務部
		医療的ケア児や緊急時の対応が必要な児童生徒の安全安心な環境づくり	指導医や看護師の指導助言をもとに緊急時の体制を確立し、ケーススタディ等を各学部と連携して実施する。	A	指導医や看護師の指導助言を得ながら、各学部と連携しケーススタディや話し合いを実施する。ケーススタディのデータを全学部で共有できるように保存先を周知する。全教育活動のみならず、登下校の安全について緊急体制を確立していく。	保健部
		感染症や熱中症の効果的な予防	各学部長や各授業担当者や情報を共有し、注意喚起するとともに適切な支援を行う。 感染状況や県からの通知に基づき、学校医や学校薬剤師の助言を得ながら、適宜マニュアルを見直す。	A A	今後も、各学部長や授業担当者や連携し、きめ細かい指導・支援を継続する。全校児童生徒が見て学べるように、掲示版で熱中症や感染症予防の注意喚起をする。 県からの通知や、学校医、学校薬剤師の助言をもとに、適宜マニュアルを見直し、全職員に周知し日々の教育活動に反映させる。	保健部
児童生徒の学校生活等における実態把握		生活アンケート等を活用し、児童生徒の気になる事象について、早急に対応できるようにする。	A	生活アンケートの活用だけでなく、児童生徒の気になる事象を早急に対応できるように学校全体がチームとして対応できる仕組みづくりを検討する。	生徒指導部	
兵庫県版コミュニティ・スクールの推進	積極的な情報発信	学校通信「どんぐり」やブログにより、学校の様子を保護者や地域の人に発信し、理解啓発を行う。	A	学校通信やブログの更新について、年間計画表を作成し職員会議で共通理解を図り計画的に実施した。改善点としては、毎月発行の学校通信については、年間6回学校の様子や情報提供の場として理解啓発を継続し、ブログの更新については、各係部や学部への配信を促し更なる充実を図る。	総務部	
	行事や授業等の改善・工夫	学校運営協議会委員からの意見を踏まえ、行事や授業の改善を行う。	B	新たな活動の可能性について、学校運営協議会で話題提供をし、実現に向けて検討を行う。また、学校運営協議会委員の意見や児童生徒の実態を踏まえて、各学部で行事や授業内容を検討し、改善や精選を行う。	全体	

チームによる指導支援体制の確立	児童生徒の実態に合わせた指導体制の充実	学級の日や学部会等で児童の実態について共通理解を図り、学習内容や児童の実態に合わせて教員が入れ替わるような体制をとる。	A	学級単位でローテーションを組んで、クラスの児童全員に全教員が関わるように学級経営を行った。次年度も引き続き取り組む。	小学部
	配慮が必要な生徒についての理解	ケーススタディ等を通して、普段の学校生活や緊急時の対応について学内で共通理解を図る。	A	中学部においては、学部での評価は3.5であった。ケーススタディを学部全体で取り組むことができた。緊急時の設定場面を設けたり、複数の生徒の実態に合わせて行ったりすることができた。 高等部においては、配慮が必要な生徒の緊急対応について教員の動きを確認したり、生徒が服用する薬が変更になったときに薬に関する知識を共通理解したりした。次年度も継続して取り組む。	中・高等部
	学習活動に応じた指導体制の充実	学部の教員がチームで生徒に関わることができるよう、学級の日や学部会等で生徒についての事例検討を行い、指導や支援について共通理解を図る。	A	中学部での評価は3.1であった。日常生活や授業の場面でローテーションを取り入れながらチームで生徒に関わるような体制づくりについて考えることができた。来年度も指導支援について学部で共通理解をしながらチームで生徒に関わっていきけるように取り組んでいく。	中学部
		目標や学習課題に応じて学習グループの形態を工夫する。	A	中学部での評価は3.1であった。年度途中での検討や見直しをすることはできなかった。今年度の学習グループを基に、生徒の実態を把握しながら目標や学習課題に応じた学習グループを次年度は考えていく。	
		個別の指導計画の各授業の担当を明確にし、授業での評価ができる体制を検討する。	A	中学部での評価は3.3であった。授業の評価をする担当教員を一覧の表に示し、どの生徒も授業での評価ができる体制づくりを行った。来年度も引き続き行っていく。	
	学習活動に応じた指導体制の充実	学級の日や学部会で生徒の実態や学習の様子等について情報共有を行う。	A	生徒の情報共有は積極的に行うことができた。ただ、今後に向けての話し合いを十分にすることができなかった。次年度は、学級の日や学部会での生徒の実態や学習の様子等について情報共有するとともに、支援内容や支援方法を話し合う機会を設ける。	高等部
		授業により担当教員を替えるなど、さまざまな教員が指導できる指導体制作りを推進するため、授業中の様子などの情報を共有できるように記録の取り方を工夫する。	A	授業により担当教員を替えるなど、さまざまな教員が指導できる指導体制作りを推進するため、授業中の様子などの情報を共有できるように記録の取り方が効果的であったか検証し、再度検討を図る。	
	性教育に係る指導の充実	性教育全体計画にLGBTQに関する項目を入れ、発達段階に応じた指導を行う。	B	「いのちの安全教育」等の国や県が推進する法令や通知をもとに、より具体的な指導内容について検討し実践していく。 性教育担当者会、全体計画を再検討し実践的な計画を作成する。	保健部
		学校医やカウンセラーと連携し、きめ細かな指導・対応を行う。	A	カウンセリング⇨コンサルテーションの後、該当保護者や生徒への関わり方の具体化など、取組を一層充実させていく。	
	子どものニーズに合った合理的配慮や支援内容に係るチームでの共通理解	児童生徒個々の実態に合った合理的配慮につなげられるように病態研修や教育支援部だより、基礎講座等の研修機会を設ける。	A	次年度も引き続き、病態研修、教育支援部だより、基礎講座等の研修機会を設ける。	教育支援部
より子どものニーズに合う支援につなげられるように、教材展や教材リストの更新を行う。		A	次年度も引き続き、教材展の実施と教材リストの更新を行う。		

#### 5 学校関係者評価

- ・学校自己評価と保護者アンケートの結果がほぼ一致している。学校の思いと保護者の思いが一致している。
- ・児童生徒の社会参加に当たっては、地域や事業所の障害のある児童生徒に対する理解がとて大切である。学校は、ホームページや紙媒体など様々な方法で情報発信をすることが使命ではないだろうか。
- ・災害時、隣接する施設が障害のある児童生徒の避難所に指定されている。災害時には地域で協力することが必要になってくる。現在の避難訓練は学校のみで行っているが、次年度は、学校と施設が合同で避難訓練をし、連携を図れば良いのではなかろうか。
- ・能登半島地震災害への募金活動を高等部の生徒が行っている。支援をされる側になることが多いが、自分たちができることを考え被災者の支援を行う活動は、生徒たちにとって大変良い経験である。
- ・eスポーツ活動を不登校支援においても実施している。自治体と協力しながら不登校の児童生徒の居場所づくりを行っている。eスポーツ活動を通じて生徒のコミュニケーションが活発になることはよいことである。
- ・eスポーツ活動でコミュニケーションが活発になったとの報告があったが、事業所においても休み時間など従業員同士のコミュニケーションはとて大切である。
- ・次年度に向けて教育課程の見直しを行い、下校時刻を変更したとのことだが、児童生徒への教育の質を向上させるために、捻出した時間を職員研修などに有効的に活用するとともに、職員が働きやすい職場づくりを推進して欲しい。
- ・今回、障害者の就労についてわかりにくさがあるとのことであったので、市役所において話をする機会があった。特別支援学校と市が連携を一緒に活動する機会が増えるといい。